

目的：生活の多様化に伴い、今日の衣生活は質・量ともに変化してきている。特に既製服が普及し、何を作るかということから、何を選び着用するか、又、衣服をどのように整理保管するかという合理的な衣生活のあり方が問題となつてきている。近年、短大の被服系の入学志望が減少し、被服科離れの傾向がみられるが、その理由として「現代の生活において、被服に関する知識や技術は食物ほど重要ではないため」ともいわれている。しかし、何を選んでも、何を着ても自由な時代ほど、何を選びどのように着るかが問われるのではないかと考える。衣服の種類や量が多様化する一方、衣服のライフサイクルは短くなり、衝動買いや死蔵されている衣服、収納・保管等の衣生活上の種々の問題に対する認識が低いように思われる。そこで、短大生における衣生活の実態を調査し、衣生活の問題点を明確にして、今後の衣生活教育のあり方を考察するために本調査を実施した。

方法：調査対象は、本学短大家政科食物コースの学生で、調査時(昭和55年6月)における日常の衣服の所持数及びその材質、着用の程度、購入、保管等についてアンケート調査をし、記入のあいまいなものを除いた234名についてまとめた。

結果：調査時における1人当りの衣服の平均所持数は、101枚にのぼり、その多くは着用されずに収納している。衣服の購入については、気に入ったものがあつた時に購入するという衝動買いの傾向がみられ、衣服を計画的に購入するという意識は低い。

日常着としては、ブラウスとスカート、Tシャツとジーパンというスタイルが定着しており、それに伴い下着の種類や着用にも変化がみられる。